

混沌の山林から

武藤 倍理*

1. はじめに

たとえ困難でも、今日の状況を積極的に捉え、確かなビジョンを抱くことは、何事をするにも基本的に大切な姿勢である。しかし約80haを保有する40才の林業経営者である私は、確かな展望を持ち得ず、状況に流されながら、多分こうすれば良いだろうと思うことを、とりあえず行って、10年ほどた経ってしまった。わが大栃林業の林は現在保育期にあり、林齢20~30年の杉と檜が70%を占める。かりに市場が安定して推移したとしても、切り回しながらうまく法正林化するまでには、少なくとも30~40年が要る。

こうした私的事情において今日の林業の閉塞的事態を述べるつもりは毛頭ない。地元で林業を営む先輩方と話をしても、私の無知は別として、見通しの明るい結論になることがない。例えば、不足する若手後継者の確保、育成の問題、施業計画における基本的な方針策定に関する、先行きの不安など、やる気のある経営者ほど深刻な問題を抱えている。

ここでは私なりに状況をとらえかえしてみようと思った。林業を営む者の現場からの便りとして、皆さんの日々研究の傍ら、あるいは行政指導の合間、心の隅に留めておいて頂ければ幸いである。

2. 近ごろの山村風景

私は山が好きである、標高2,000m以上の岩山も好きだが最近では1,000m前後の奥美濃の藪山が好きである。藪山は、いわゆる登山の対象とはならず、従って頂上へ通じる整備された登山道はほとんどない。だから谷をつめて登る事が多い。それで数年前から溪流釣りも始めた。このごろは「花より団子」で頂上まで到達することが少なくなってしまったのを少々気に病んでいる。

登ることと釣ることのジレンマの中で、5万円を眺めては赤線を引いたり、等高線の混み具合で妄想に耽ける事がしばしばである。これくらい正業に熱心であれば少しは、わが山林も美しくなろうというものだが、熱力学の第2法則には逆らえず、私の自然はいまも健在である。この様なわけで暇を作っては奥美濃の山域を徘徊する次第なのだが、近ごろは寂しく思うことが多い。それは山村の活気が失われてしまったことから来る気分である。私の住む岐阜県郡上郡はそれほどでもないが、武儀郡や本巣郡の山村の佇まいには寂漠たるものを感じる。山本素石氏によって描かれたあの景色はやはり過去のものである。そして氏も鬼籍に入ってしまった。こうした山村の傾向は、無論いまに始まったわけではない。象徴的に云えば「東京オリンピック」を境にしてである。原因を辿れば明治の頃まで溯らなければならぬかもしれない。大正初期から昭和初め迄の陸地測量部

* 〒501-42 岐阜県郡上郡八幡町相生1380 武藤設計事務所

の地図には、今は閉じてしまった峠道がいたるところに画かれてあり、往時の活気が偲ばれる。何故、四半世紀余りの間に山村が没落したのか。私の専門ではないので深くは分からないが、単に木の成長が日本の工業力のそれに追いつけなかったでは、ブラックユーモアにもならない。

「ふるさと創生」や「村起こし」が近頃叫ばれている。私の地域の村々においても、こうした一連の施策としてキャンプ場の造成やイベントが行われている。確かに宣伝による人集めや、こうした運動によって当時者の意識が惹起こされる効果はあろう。しかし大切なことは地域の産業に地力をつけることだと思う。林業家の立場からは、山間にこだまするチェーンソーの音や、働く人々の活気を、もっと感じたいのである。そうした運動が場末のキャバレーの客引きの如きものになって欲しくないと切に願っている。地域に居職する我々は色道の専門家ではない。ここはまさに多方面からの真剣かつ総合的な研究を必要としている。しかし、大学や研究機関がともすれば高踏的過ぎるのではないかと思う。あるいは行政の、上意下達の旧態から脱し得ない、日本的体質があるのではないか。そのためにも、例えばこの「林業統計研究会誌」が、もうすこし粋な名称に装いを改め、広く一般の書店で手にすることができる状況がくることを望みたい。民、学、官の有機的な交流がもっと活発に行われることを期待したい。本誌14号のニュージーランド特集には彼の国のそうした活況が伺え、ラジアータパインの恐るべき展開に、何故か納得した次第である。

3. アウトドアブームと林業

ナイフを巧く使える子どもがいない。都市の話ではない。田舎のことである。一方、アウトドアスポーツが流行っている。週末にはフル装備の四輪駆動車が大量して登ってくる。書店へ行けば、昔は「岳人」、「岩と雪」そして「山と溪谷」程度だった山の本が、今は確かに増えている。しかしその多くはいわゆるカタログ誌である。外国のことはわからないが、雑誌類は時代の鏡である。夥しい雑誌が書店を占領している。情報の氾濫である、と思ったが手にしてみるとどれも内容は似たり寄ったりであった。どのジャンルも同じである。テレビのニュースも各局、同曲異奏といったところである。情報が氾濫しているのではなく、単に同じものが溢れているにすぎない。新手的な全体主義でないかとさえ思えてくるのである。

今は子供にとって受難の時代である。同じコースを歩かされ、落ちこぼれる自由すら無いように思える。ナイフなど使って悠長に遊んではいけないのである。

かたや都市部を中心にオートキャンプに代表されるアウトドア遊びが盛んであり、それは一時の流行でなく、今後ますます広がる気配を示している。もとを辿れば、諸産業の集中化による都市の居住環境の悪化に由来する。構造的な改革の必要性が叫ばれつつも、改革そのものは、いっこうに進展しないことが根本的な原因として底流にあり、その上に日本人の右にならえの性格がブームを加速していると思える。

画一的な情報のなかで、深く自己を掘り起こす作業なしに繰り広げられる遊びは、時間と空間の消費であろう。しかし根底に上のごとき構造的問題を抱えているだけに看過できず、例えば建設省、

林野庁においても、これからは、森林浴など都市型レジャー施設を各地に設置する事を検討していると云う。

こうした時代の傾向というものについて、わが山村住民は如何に対処したら良いのだろうか。この事は後で考えてみるとして、ここでは、山で働く人々こそが、アウトドアの遊びに必要な本当の知恵を持っていると云いたい。せめて、この知恵を遊びに来る都市の人々に伝えることができないであろうか。現状はなかなか難しい。生活に対する共通の基盤を持ち合わせないこと、従って山林についての共通の認識がないことがその理由である。

4. 自然保護と林業

林業経営者にとって山林とは職場であり、林木は財産であり商品である。これが基本的な認識である。社会的見地からすれば、山林は、国土保全、水源涵養、保健休養などの機能を備えた、極めて公共性の高い存在である。経営者はこうした社会的な前提のもとに経済活動は行ってきた。しかし今日の状況では、従来のバランスの上に、さらに自然保護という概念が加わってきている。例えば「長良川河口堰」建設についての国民的な関心の高さがそれを物語っている。堰の建設と治水を混同して議論されたり、安易に「自然」を持ち上げたりする是非はひとまず置くとしても、長良川の生態学的特徴に資産的価値を見いだされているわけである。このような天然資源に対する価値観の転換は、長良川だけでなく、知床の原生林、白神山地のぶな林の保護運動等々に見るまでもなく、自然保護の運動は時代の潮流である。

こうした状況を踏まえて本誌13号の中で東大の南雲先生が21世紀に向けた森林経理学の方向について書いておられた。それらの成果を是非私共に提示していただきたい。

再び言うが、一林業経営者にとって山林は生活の場である。木を植え、育て、伐る事が本業である。上のような、新しい状況の中において我々は何処に位置付けられるべきか、を示していただきたい。

これからの林業の在り方は、自然保護との関係だけにとどまらず、都市と山村との新たな関係の構築を模索する中で捉えなければならないと私は思う。

自然保護が地球規模的環境問題として様々な形で提起されている今日、これを具体的に考えると、ここにはいつも「南北問題」が浮上してくる。林業の、あるいは山村の将来を考えると、ここに現れる諸問題の構図を左記の関係のごとく類推してしまう。山村の低い生産性(=後進性)の上に築かれた都市のアンバランスな繁栄、そしてそれ故の「自然保護」の動きが、山村不在の形で行われている事がこれである。

困難な問題が文字通り山積している。しかし森林を生かすも殺すも最終的には現場に居る我々である事を自覚しなければ状況は変わらない。

5. 今後の林業

以上、山林を取り巻く今日の状況を、林業を営む者として眺めてきた。曰く「村起こし」運動が

進められているが、未だ決定的な効果がないこと、森林がレジャーの対象として利用されつつあること、自然保護意識の昂揚の中で、安易な施策が成り立たないこと、国産材の競争力が低下の一途を辿っていること等々である。こうした状況は、林業経営を昔日のごとく行っているだけでは、とうていこれらの現実に対応して行けないことを示している。もともとライフスパンの長い樹木を相手にしている我々である。ニュージーランドのように、30年を1回転とは考えられないまでも、むしろわが国では50年、100年の計に立ったビジョンが絶対必要である。

為すべき事は多い。陳腐な結論であるが、徹底して問題を洗い出し整理することから始めるしか途はない。そしてこの作業は様々なレベルで行われなければならない。林業経営者は保有する山林を見直し、評価し、合理化を再度行うべきであろう。労働力不足を補う機械化が可能か、植林する樹種や密度に問題はないか、施業計画を立案する手法に手ばかりがないか、等々である。

私は施業計画や立木調査の整理等にパーソナルコンピュータを使用している。処理が早い事は言うに及ばず、表計算ソフトウェアを利用すれば簡単なシミュレーションを容易に行うことができる。一年前から名古屋大学の森林経理研究室で開発された「CAFIS」(Computer-aided Forest Inventory System)を試用させて頂いている。これなどは森林簿を基本に調査結果の更新、検索、統計、成長予測、等をグラフをまじえて出力できるようになっており、これからの林業経営には強力な道具になると思われる。

「CAFIS」開発の経緯を末田さんに尋ねたら、暇にまかせてコンピュータと遊んでいて着想したそうである。林業を取り巻く閉塞状況は案外こうした遊び心から出口を見いだすことができるのではあるまいか。先に述べたアウトドアブームについても、商業情報に惑わされる事なく、まじめな遊びに発展すれば林業の側面からの助けになる可能性があると考えるのは楽天的過ぎるだろうか。しかし林業界のみならず教育界など、行き詰まっている様々な分野の、メンタルな部分を蘇生させるエネルギーは、まじめな遊び心からしか生まれないのであるまいか。

情報の氾濫について前に書いた。情報は氾濫しているのでなく実は不足しているのである。林業を行なう上で本当に必要な情報(=知識)の不足である。例えば経営者どうしで得られるそれは、情報と云うより慰めであったり、なれ合いからの希望的観測であったりする。同族どうしで得られるものは情報の如きものである。民、学、官の活発な交流を期待したい。

そして、そうした交流の成果として、データベースシステムや、エキスパートシステム等が誕生することを期待している。このことは、単に収穫される成果についてだけでなく、構築する過程において、林業を取り巻く諸問題が、具体的な形で共通に認識されることや、不足する後継者の問題に対し、ともすれば埋もれがちな、現場の知恵が生かされることの期待なのである。

縦のつながりや横のつながりといった常識的なことでなく斜めの交流を望みたい、そうすることで意外な発想や知識を得ることができ、そして独善を防ぐことができる。

こうした意味で、本誌が今後も開かれた研究会誌としていっそうの発展を遂げる事を願い希望するものである。